

スペイン革命におけるCNT (3)

ホセ・ペイラツ

今村五月訳

第3章 カサス・ヴィエハスの共和制

一九三〇年がうち続く政治不安の年であることはすでに指摘した。しかしながら、経済的要求をもつ諸ストも全地方に繰り広げられた。共和制へのセンチメンタルな転換の年であり、憲法擁護闘争、政治集会への移行、風説と驚愕、経済危機、資本逃散、労働者、学生と政治勢力との間の組織的衝突の年でもあった。

CNTは、政治家たちが特赦のためのキャンペーンで示した人物の限定に反対して、彼らの数千の囚人の奪還を要求した。カタルニャとアンダルシアには社会的興奮の空気が満ち満ちていた。左翼の政治的分子たちは彼らの新聞や議論で反王制のあらゆる擾乱を厚く支持した。サンディカリストと共和主義者が同じ演壇から発言した。流血のゼネストが頻発した。かかる事態が一二月にハカとクアトロ・ヴィエントスの暴動となり、やや遅れて翌年四月一日、地方選挙の結果、共和国宣言となるのである。

国王の亡命後、権力の移行が行なわれ、共和国の地方政権が樹立

されて、新政府は騒乱に幕を下ろした。

共和主義者と社会主義者は、彼らの究極目的の社会、すなわちブルジョア共和国という理想を達成したわけである。結局、革命は終わったのだ。スペインは、労働者に取り入るといふ意図的な緊急問題をかかえることになった。しかし、政府はこれらの問題を冗長な法律制定の手續きにまかせて約束以上のものを与えなかった。左派によれば事態は法律に即して処置されねばならなかった。しかも法律というのがまた作られていないのだ。だからデモクラシーの正統論に従ってなされなければならない。これは議会から始まらなければならない。議会は選挙——この場合憲法制定の——を行なう必要がある。選挙準備の十分な期間を計算に入れなければならない。地方政府は確実な処置を講ずることはできなかった。せいぜい手続き問題に関して条例を定めることはできた。このためには役人を任命し、俸給を定め、予算をカバーするための財政措置をとらなければならない。しかし、スペインの半分が声を大に要求している農業改革は、水利・工業計画は、土木や失業対策事業の

開始は、二四時間内にできはしない。おそらく後に見るだろうところによれば五年の内にもなされないだろう。その反対をいけば右派を脅し、財政恐慌、商業麻痺、資本凍結ないしは逃散を誘発することになろう。結局、飢えた国民は待つことができるし、待たねばならないのだ。

そして、国民の飢え、プロレタリアの家計の窮乏に対して政府はこう答える以外にすべがなかった。「共和国を確立しなければならぬ」。労働大臣ラルゴ・カバリエロは、ムッソリーニに代わってそれを引き継いだ独裁制の遺産、同数委員会¹⁾の模写であるあの有名な四月八日法でもって仲裁義務を課した。労資合同協議会は体のよいスト権禁止を意味していた。四月八日法は全国労働連合の心臓と直接行動戦術をねらった鋒先であった。

(1) 「同数委員会」はプリモ・デ・リヴェラがムッソリーニの政策をそっくりまねて作った労働争議に対する強制仲裁機関であり、当時UGT書記長ラルゴ・カバリエロも参画した。彼が共和国労働大臣となつてからこれを手直して出した法令が「労資混合協議会法」いわゆる四月八日法である。

共和国のブルジョアたちは今やブルジョア階級を脅すような紛争を望まなかった。また、王制のシンボルを取り換えた他はすべてが以前と同様に続くという保証つきの権利を脅すこともならなかった。そして、ストや飢餓が条例によつても制圧されないで増大するようであれば、他の法律、共和国防衛法が、さらに浮浪者不法取締り法が、さらには「無警告発砲法」が、「擾乱者たち」を納得させようとした。ブルジョアと反動の平和のチャンピオンであるマウラ

とラルゴ・カバリエロは、共和国と王制派の治安警備隊と労働者突撃隊の前線に立った。

社会党大臣でありかつ同時にUGT書記長である彼の手になる四月八日法の他の効果の一つは、全国労働者の大半を結集する二組合の間の敵対関係を助長したことだ。内閣による反プロレタリア闘争宣言が意味するものは、組合内部の闘争と公然たる分派主義のけちな表明である。政府の共和派ブルジョアたちはこの労働者間の分離政策と同志打ち政策を支援した。

これが、成立後数日の新体制の危機の原因だった。危機は、兵舎や僧院にひそんで待機していた反動の利するところとなる。

六月一日、マドリッドに召集されたCNT臨時大会は開会を宣した。この大会は目の前にいくつかの直接請求方式による問題をかかえていて、連合の組織の内部的批判の観点に立つて解決するべく召集された。

大会の空気は最初から基本的な論争で満たされていた。我々の経験のかぎりでは危機は遠方より来る。その根はCNTの戦術に対する忠誠という論点の問題にあるのだ。

この侵食的な危機の根本には何があるのだろうか？ 一方には言い難い疲労と無力感と落胆の進行、他方には革命的前進の正統論的見通しがあった。双方の潮流が真の目的を歪曲した一連の要因と混交していた。その態度の誠実さ、理論的原則への反逆ないしはそれからの回復である真の優秀性とは別に、危惧や自己愛や放縱な熱情のような観念が存在していた。

共和国の現状は、それがもたらした約束と失策が、感情と主張の過激さをかくも刻印されているスペイン土着の氣質を宙に浮かせて

しまっているのだった。スペイン人は断定的な肯定と否定によってだけ生きていられるのだ。問題に含まれていた他の要因はスペイン人の鋭敏な感受性だった。仮定か実際の誤りを犯しているからといって、刺すような辛辣な言葉でスペイン人を非難するのは、神経の危険を誘発する最も簡単な手である。しかしながら、いや、多分それだからこそ、柔軟で冷静で慎重な説得以外には我々の行動に欠けているものはないのだ。イベリア人は誇大癖と神経過敏と超衰弱質の人間である。不愉快な非難を受けたというたった一つの事で非難された者は不機嫌の虫になってしまふ。

CNTのこの大会に触れたのだから、そこで全国委員会の報告に関する討論から生じた険悪な問題に言及しておくべきだろう。白熱の議論を引き起こした問題では他にCNTの再建をめぐってのものがあった。ファン・ペイローの長い意見が原案の基本になった。同議案に関してサンタンデル地方組織は問題点についての単独意見を表明した。

全国工業組合および連盟の設立を擁護する広範な意見がのべられているが、いくつかの発言を通してそれを示すに止めよう。

単独意見の草案者フリオ・ロイの発言。

「サンタンデル——この議案は組織とその原則にとって極めて重大な危険をもたらすだろうと考える。全国工業連盟を結成するべきいかなる基本的理由と動機があるのか？ マルクス主義者の理由である。ブルジョア経済の展開と発展の段階に於いて歴史の現時点でブルジョア経済の展開に同調しようという理由である。我々は独占すなわちカルテルに対抗して巨大な労働者の団結を組織しなければならぬ。スペインが工業国というよりはむしろ農

「その議案に反対する、なぜなら、それに対する好意自体暗黙の留保を含んでいるから。その内包する危険を見よ。二つの考えがあることは明らかだ。価値を行動におくか、個人におくか。工業連盟に賛成する者は、微妙な要因に対する信頼を失って機械の歯車しか信用しないからそう言っているのだ。私は、機械は力を生むのではなく消耗するものだとやりたい。この意味で、我々は、すべて個人を機械化しようとするものに対する反逆の精神を創造する。それでは、経済の至上命令の逼迫は回避すべきだろうか？ 否。しかし、組織全体が労働者自身の衝撃を有するようになければならない。工業の集中に吸収されている工業がある。履物工業の場合を例にとってみよう。それは、人数と数字と組合にある統計とに基づいて組織を有している。紛争が起きたときに然るべき出所を持つておくためである。しかし、地方における組合の自由を禁じる手段は作られていない。なぜなら、それに合わせて機能主義が生まれるだろうから。自由コミュニケーションに進もう。資本主義組織を撃滅することを言っているのだ。全国連合を守ろう。その基本原則に従って働こう。資本主義の歯車は早晩かならず消滅するという理想を持とう。静止状態と思われるものは決して受け入れまい、あらゆる静止状態は必ず力関係に変わる傾向があるのだから。」

ファン・ペイローの発言。

「……マルクス主義者たちの恥知らずには身ぶるいせずにはいない。マルクス主義が社会で人気を博している経済的事実であるなら、また、労働者たちが毎日経済的現実と直面しているなら、次の二つのうちの一つに当てはまらなければならないはず

業国であるなら、なぜ工業連盟を作っていくかとするのか？ 工業の点から見ると我々は非常に遅れた状態にある。スペインでは公共企業の独占を除けば発展した工業はない。共通利害を守るために工業協会をつくっている数種の工業会社はあるが、生産を集中するあるいは全国的にすることができるといえる工業の規模にまでは達していない。しかも、そのような資本主義的集中が実際あるとしても、我々の哲学をあらゆる事柄に適用しつつマルクス主義的概念とは異なる道を行く我々が、単にブルジョア経済がそういう形で発展するであろうゆえに我々自身の原則を放棄し、かつ失敗するというようなことがありえようか？ ないと確信する……全国工業連盟は、我々の綱領を示す我々の原則にも、社会主義者の原則にも、アナキストの原則にも一致しない。だから従うべき模範ではありえない。スペインではその必要はない。公国工業連盟が国家的集中の一種になるという疑いの何と可能なことか。なぜなら、一度一般化したそういう組織は全工業が国家的中心に代表されている事実を考えると、それをもって国有化に至るにちがいないと考えるからである。これは我々の組織に導入された官僚制となるだろう……連合は、UGTに存在し、ドイツやイギリスの組織に存在するような官僚制をつくり出すことになるだろう。私の組織は同意できない。専門的職業的改良以上のもの、我々の組織の示す綱領に代表される何かがある。我々は従わなければならない、もし我々の原則を承認するならば原則を守らなければならない。改良の代わりにより高価な主義を守らなければならない。」

ホセ・アルベロラの発言。

だ。マルクス主義が経済的現実であるか、経済的現実がマルクス主義であるか。しかし、我々は、常に我々を資本主義から救うべき行動をとらせる経済的現実と直面しているのである。私は過去も現在も決してマルクス主義者ではない。私はマルクスを読んで受け入れるべきを受け入れ、拒否すべきを拒否する人間である。理論を通してよりも実践を通して語るべきである。私は資本主義が集中しつつあるのを知っている。私は、すでに語りすでに認識していることだが、いかなる時点においても尊重されるような連合方式のあらゆる保証を有する機関がなければ、権力を濫用する者が現われるや、すべてが無に帰することを知っている。そして、もしこの事が危険を認識することであるならば、その危険は自由コミュニケーション自体をも含めて全人間労働に見出さねばならない。もし道徳的権威を有する人物がいて、そこで支配者たるべき人間が権力者、専制者として創られるならば、全国工業連盟に見出されるものは、コミュニケーションに見出されるものと全く同じである。人ある所、不完全と危険がある。単独意見に依拠しつつも、それゆえに我々が働かなければならないなら、支部組合、工業組合は決定的手段、あるいは原型であるということをあえて認めなくてはならない。我々は根本を探って、集中あるいは集中への傾向があることに気づいた。また、我々は、全国委員会が一般ならびに経済問題に関与すべきであり、もしある委員会で沢山の仕事が出れば、その委員会はそれらの問題を解決するために官僚的機構をつくる必要が出てくる、その時には同様の危険が生じるだろうということにも気づいた。なぜこれらをそんなに断定的に予断するのか？ 意見の中では、局部的様相ではなく全スベ

ンの様相で資本主義は破滅に向かつており、すでに工業的・経済的に全国的方向で発展し活動していることがうまく設定されている。もし指定された工業のブルジョアたちが工業としてではなく、すでに階級として自衛のために共働するならば、労働者たちは対ブルジョア統一戦線を結成する目的で結集できる情勢にあるかどうかが問われるべきだ。答は明確である。少なくとも私にあっては。これは言い過ぎかもしれない。私は、我々の討論していることが何よりも言葉の問題であると思う。危険が語られ、意見を出した我々自身がそれについて留保していると暗に非難されている。これは確かなことではない。全国工業連盟をめぐって表明される反対は単に連盟に反対するのではなくて、反対するのが好都合だと思ふ者がそうするからである。これが繰り返された後で、原則的にそれ自体声明と考えられる単独意見が主張されている。組織は全国工業連盟に基づいて建てられるのではない。今日まで連合がとってきたことと同じである。全国工業連盟を連合に浸透させようとして組織計画が作られ、連合の組織とは一体何であるかに思い至らされた。連合で動かさうる唯一のものは、生活の全問題、プロレタリアに関係のある全問題を学ぶという使命を十分に果たすために、委員会に内的広がりを与えるような内的機構であり、内的活動である。もし、五人から成る委員会が経済的・道德的・社会的秩序の中で労働者の利益となるあらゆることを学ばなければならぬので、そのために、また、それを実行するためにいかなる仕事もなしえないなら、それは組織ではなく、委員会の機構が折衷であり、すり交えられているからである。ガラス労働者や同種のスペイン労働者たちは、すでに三〇年

間なのだ。そこでは、彼らに例証するのが痛快だった諸理由のたに解決ではなく破局に至った。しかし、工場主たちはどうしても紛争を解決しなければならなかったので、交渉に入り、バルカルのストライキを即時解決するために石炭・石膏・セメント工場主組合の副会長に統一組合と会見するよう委任した。そして、労働者の要求した経済条件に対する回答で紛争が解決されると、統一組合の委員会と工場主委員会が道義的問題をすべて解決するために交渉を続けた。だが、ストライキ中のその工場だけのためではなく、バルセロナの工場だけでもなく、カタルニャ四県の全工場のためであった。そこでの第一の点は労働者の代表権を誰が持つかということだった。我々には組織がない。地域連盟も地方連盟も介入できない。しかも問題はもっとある。工場主たちが言っている、「労働者の要求するものを我々が与えることは大したことではない。しかし、スペインの他の地方の工場主たちが我々と同じ平等なプランの上に立つという条件の上でだ。」私は彼らの一人に言った、「そうなるかと少々むずかしい、少なくともすぐには。それでは解決がない。しかし、大会開催後、全国工業連盟が発展することは大いにありうる。そのときには全利益をもたらしこの問題を解決できる機関になるだろう。」工場主たちが統一組合に同意してカタルニャに関する問題の解決に到達するのをしばらく許すしよう。だが労働者たちは強い要求を持っているので、工場主たちを同意できない立場に立たせることになるだろう。と言うのは、彼らはスペインの他の地方の工場主たちの責任を負っているのである。労働者の代表権を採りうる者は誰か？CNTの委員会が？いかなる名目で？つまり、ここで、この

前から全国工業連盟をもっている。ここに私の言葉を証明してくれる同志たちがいる。誰も示さなかった全国職業連盟廃止の必要について、会議が連盟の原型として認めた連盟をもつガラス労働者たちがコメディア劇場で一致したとき、少なくとも連合主義の原則の遵守に関しては我々は我々の連盟を解散して委員会にしたのである。なぜなら委員会は連盟委員会が行なってきたことをすべて正確に、かつ断固として継承したからである。実際我々は連盟を今も持っているのだ。ただ単に会議の命令に従って連盟という名を去っただけなのだ。第一インターの第三回大会が全国工業連盟の採択を勧告することに決定したとき、我々は規程を設けて新たに全国ガラス工業連盟の名称を採る許可を得たと考えた。現在全国ガラス工業連盟の委員会が前委員会と同じ役員と全く同じ機能を有していることを指摘できる同志がいる。それは事実だ。議案では全国工業連盟の委員会は単なる連絡委員会であり、単なる代表であってそれ以上のものではないとはっきり定められている。技術的経済的の面に限られていて、連盟に加入した組合が指示する以上のことはできない。組織が工業連盟の必要性を表明した最近の具体的な例がある。バルセロナには、ストライキが今も続いているかどうか知らないが、セメント工場がある。とにかく、ブルジョアに対抗して一つの町に孤立した八〇〇人の労働者がそこにいた。ストライキが続いて、CNTに属する労働者たちは労働地方代表部に持ちこまなければならなくなった。労働者の決してやるべきことではないのだが。かく諸君に語っているのは、改良主義者と非難され、三〇年の闘争の間これらの紛争が政府の機関で解決されることを決して望まず、また許さなかった人

問題を解決できる組織がないのだ。これは実践論である。議案にはサンディカリズムが目的であることは語られていない。それを語っていない。私はそこを明らかにしようと思う。私は、個人生活の目的は生産ではなく反って生産の享受であると言っているのだ。私の見方からすれば、生産を組織する手段はサンディカリズムである。個人が完全かつ十分に生産と全国家的富を享受できるような目的はサンディカリズムではなくて、アナキズムである。ところで、あまりにも広義に解釈されているこの議案の中で、サンディカリズムの面だけでなくアナキズムの面をも包含しなければならぬと意図されているのなら、アナキズムの面こそはるかに広いのである。だが、次のことは明らかだ。私はサンディカリズムが目的だと考えている者ではない。私は最近新聞でサンディカリズムは手段であって、目的はアナキズムだと言った。諸君、ペイローは二四時間前に言った言葉を今日修正するほど貧しい精神の持主だとは考えないでもらいたい。」

全国工業連盟に関する議案の票決は次のような結果になった。賛成三〇二、三四三票、反対九〇、六七一票。

簡単に音楽学校の大会での組織の構造に関する部分に目を向けてみよう。新しい組織機構の問題が誘発した騒ぎが大きかったとすれば、第八項でもたらされた騒ぎはそれに劣らず大きかった。それは次のように記されている。「憲法制定議会への召集状に対するCNTの見解および同議会に臨む政治的・法律的・経済的要求の計画」。この項を日程に組み入れることは傲慢と紙一重の無分別と思われる。次のように述べられている見解の序言は一連の根本的対立に遭遇した。一方、表明された要求はCNTを戦闘体制を取ることので

きない組織へと引っぱっていった。にもかかわらず、こう声明することになった、「憲法制定議会は我々の干渉が直接間接にもたらした革命的事実の産物である」。続いて、原則として、歴史的事実の累積に立つ信念として、憲法制定議会には何も期待しないと述べられた。

CNTの目的として同様の要求が作成され、その戦術に適った手段で追求され、また、属していた組織と、最後には原案を承認せざるをえず、原案の終章を含めざるをえないという修正とが不問にされたなら、あらゆる邪推は回避され、紛争を免れただろう。その場合、この点の言明に対して明らかに別の記録の作成が必要になったであろう。しかし書記局原案はその見解が連合の直接行動戦術をそれ以上矮小化しなかったと主張することに執着した。そして実際異例の手続きで実践に入らうという事は原案自体の中では決して憶測させなかった。だが、そういう場合、放棄した組織に従属することを原案が終始主張するのは何に對してなのか？ 過失に對するこの執着は全国委員会の報告によって惹起された危惧の炎をいやがうえにも助長しないうではなかった。

ここに原案の序文がある(傍点は著者)。

「大会に十分な意見を提出するにはこのテーマは多分最も粗雑だろうということを、本原案は無視することができなかった。この中で、解放を切望するスペインのプロレタリアの抱いていることがすべて表明されるだろう。同時に、「検討の余地なし」として難局を突破できると考える者もいるかもしれない。憲法制定議会の問題はすでに政治的問題なので、CNTにとっては関心のないことだから。しかしながら、今日の歴史的時間が我々の注意を

影は、カタルニャ人民がすでに獲得した良識の水準にカタルニャの兄弟たちが到達できない間はおも勢力をもつにちがいない。同じことはガリシアでも生じるだろう。そこでは多分無色の法律ができるだろうが、反動的な精神が優勢になるにちがいない。かかるすぐれた政治的な現象に對してCNTは立ち上がらなければならない。人民によって人民のために獲得された自由がすべての者によって享受されるように、人民のこの共通の願いに一致の条件を与えるため、また、ガリシア人もアストゥリアス人もバスコ人もアンダルシア人も兄弟であるのなら、大衆の無知にふさわしく政治的経済的次元でも低劣な条件に生きなければならぬ現状と恥ずべき痛苦な事実とから同時に脱出するために、諸地方の労働者の願望を採り上げないならば、CNTは自滅するであろう。我々連合主義者の原則は普遍救済説と解されることを決して否定するものではない、むしろ肯定するものである。そして地方立法に關して言えば、スペインのプロレタリアにとって生存と自由との背反を意味するものは何であれ否定するだろう。彼らは共通の願望と感性を有しているのだ。もし我々の前提の基礎が相互扶助にあつて、全員が個人のために個人が全員のためにという言葉に要約される人類の目的を常に語るのであれば、義務としても論理的にも人民にこう言わなければならない。人民の精神と感情を政治的・経済的・法律的に形成している各地方の民族的条件をよく注意して、立法は平等の完全な条件を有していなければならない、だが、遅れている人民の反動精神が受け入れられるようなものではなく、より広い進歩的概念で作り出されるような平等の条件が基礎となるように、と……」

要求していることを我々は認めている。スペインの政治的社会的問題に對してわが国は神経を集中している。CNTがこれらの問題に關与するために独自の手段と力を有していることは明白だ。ここに我々の非政治性、むしろ、反議會主義と言う方がいいが、が存在する。憲法制定議会は我々の干渉が直接間接にもたらした革命的事実の産物である。これらの事実に關与するとき、連合の彼方には同じように虐げられている人民、解放されるべき人民がいるということを我々は考えるのだ。我々の広く正しく人間的な前提は、一人の人間ですら奴隷としては生きられない国をめざして歩んでいるのだから。己れの野心と利己主義以上の計画を持たない諸政党的犠牲になってきた人民、どこへどうして何をしに行くのか理解するための基礎教育以上は受けたことのない人民を思いやつて、CNTが今日の歴史的時間を看過することはできないことを我々は知っている。現在、政治革命は新しい立憲議會を建設するために憲法制定議會を設けている。我々は直ちに次のことを声明する。原則として、歴史的事実の累積に立つ信念として、資本主義社会の空気の中に生まれ、政治・法律・経済の三重の面で自己のヘゲモニー確保に専念している憲法制定議會には、我々は何も期待しない。これが我々なのだ。だが、政治革命から派生したこの現象は、その重みゆえにCNTにとって最大の重要性をもつ産物である。我々は、スペインの諸地方が自己のために要求している個性のことを言っているのだ。これらの地方は法律を、当然のことながら各地方の特性と政治的状况とに従つて制定する。カルタニャは伝統的に自由の法を、逆にバスコは反動的な法を制定するだろう。テロの醜聞でスペインを包むカルリズムの

ここまでが原案の前置きであるが、保守精神を反映している言葉のあいまいさは容易に証明できる。続いて、代議員の間で戦わされた激烈な論争の成果である修正案の原文を引用しよう。

「憲法制定議會に臨んで——我々は我々を圧迫しているあらゆる権力に對決する態度で制憲議會に臨んでいる。我々は國家に對する公然の戦いを継続している。我々の神聖崇高な使命は、完全な自覚をもって我々に加わり、社会革命によって我々の全的解放を達成する必要があるように人民を教育することである。我々独自の存在の活動的部分をなすこの原則の他に、最低限の要求の計画を人民に示すという不可避の義務を負っていることもあえて認める。その計画は独自の革命勢力を養いつつ要求しなければならない。」

この大会の一般的印象は、CNTの内部危機の種が播かれたというところだった。敵意が芽生えたのはすぐ後のことだった。いわゆる「三〇人」声明は文字以上にその精神において宣戦を意味した。この記録の公開によって論戦が開始され、その結果、多少とも公的立場にある者の辞任や中間分子の罷免となった。イベリア・アナキスト連盟はこの改革運動の深部に關与したが、それは仮想の「FAIの独裁」に對する改良主義分子の激しい反動を伴った。セバステヤン・クラブ、ファン・ペイロー、アグステイン・ヒバネル、リカルド・フォルネルスは三〇人声明の署名者であり、「ソリダリダッド・オペラ」の編集者であったが、仕事を停止させられ、活動を認められなかった。フェリペ・アライスはが圧倒的多数で連合新聞の主幹に任命された。カタルニャのいくつかの組合では改良主義的傾向の重要分子の追放が行なわれた。後にこのやり方は相当の組合や

地方連合にも適用された。罷免者や追放者はみずからの意志によってCNTの枠外で辞職や就職をしたが、いわゆる「反対組合」の起源になることになった。

ここに、署名者の名簿のついた有名な「三〇人」声明がある。

「同志、組合、全諸君へ——わが国がさしかかっている状況を表面的に分析しただけでも、スペインが深刻な革命的傾向の時期にあると言わざるをえないであろう。ここから深刻な社会的混乱が発生しつつある。この時期の重要性と革命時代の危険性を否定するわけにはいかない。なぜなら、好むと好まざるとにかかわらず、これらの事態の力そのものが我々すべてを混乱の結果に引き入れたからである。共和国の出現はわが国の正常な歴史に断絶をつくった。王制は倒され、王は王座を追われた。独裁とマルティネス・アニド、アルレギの弾圧時代の攻撃を耐えた諸団体、政党、組織、個人の暗黙の協力によって共和国は宣言された。すべての一連の出来事は、王制復古以来最近の五〇年間、それまでの国民生活とは異なった状態、新しい局面へと我々を運んだのだ。しかし、以上のことが、我々に政治のあり方を破壊して過去と違った時代を開始しようとした膠着剤であったにしても、後に起きたことは、スペインがまさしく革命期を生きているという我々の断言を証明してきた。国王の逃亡とすべての守銭奴と『貴族』の亡命が許されたので、巨大な資本の逃散が工作され、国は以前にもまして窮乏化した。財閥や銀行家や政治家や、国債と利札の生活者たちの逃亡に続いて、厚顔無恥の投機が始まった。すさまじいベセタの下落と、国富の五〇パーセントの切り下げが起った。

えなかった。いかなる独占も解体しなかった。人民の飢えと苦しみと窮乏から搾取して成り上がった者たちのいかなる権力濫用も阻止しなかった。特権の縮小と不正の打倒と悪名高くかつ不名誉な盗みの回避とが計画されると静観を決めこんだ。だから、その結末に驚くことがあろうか？ 一方に尊大と投機と、公共物、共同体の財産、集団に属するもの、社会財産の詐取があり、他方に怠慢と、弾圧者、搾取者、人民の加害者への寛容があり、人民に対しては投獄と追求と脅迫と殲滅があった。

そして、これにふさわしい結果として、人民が耐え、成長し、飢えと貧困をやり過ぎている中で、人民が行なった革命をいかに隠しおおせるかを見ようではないか。公職で、法的決定で、革命を裏切ることができる所ではないか。でも、国王の公然の好意と大臣たちの勢力によって地位についた者たちの居すわりが続いた。このような状況は、一つの体制が崩れた後、完遂されなかった革命に不可避的、必然的に起きるものであることを証明している。大臣たちは経済体制の破産を知りつつある。新聞は人民の不満を確証し、人民は彼らが犠牲となっている虐待に対して立ち上がりつつある。したがって、すべての者が、国は革命を救い、みずからを救うために早急に決断をなさねばならないことに同意しつつある。

一見解——深刻な全面的破局情勢にあり、人民は彼らを脅かし、殺戮する苦しみから免れようと望み、しかも唯一の可能性、革命しかないとするれば、革命にいかに対処すべきか？ 革命は常に人民をして既成権力に向かって突進させた少数の勇氣ある者が行なつたと、歴史は語っている。同じ状況で弾圧体制とそれを

スペイン人民の大部分に飢えと貧困をもたらすためのこの経済的利害に対する攻撃に、僧服や地下生活者や、勝てば神と悪魔に同時に仕えて何の不都合もない者たちの隠れた偽善的な陰謀が続いた。征服すること、支配すること、屈従している人民全体の搾取によって生存すること、それは人民全体の上に立つということである。これらの犯罪行為の共謀の結果は、公的信用の深刻かつ重大な麻痺と、したがって全工業の衰退とであり、わが国ではおよそかつてなかったような脅威的な危機を誘発した。作業場は閉鎖され、工場は労働者を解雇し、操業は麻痺するか再開されないままである。貿易の注文の減少、国民生産のはげ口の不足。何週間も職なしで過ごす労働者。二、三日、あるいはごく少数が四日の操業に限られた無数の工業。まる一週間の仕事を待て六日間工場や作業場に通うことができる労働者は三〇パーセント以上ではない。国の窮乏はもはや既成の承認された事実である。人民が耐えているこのあらゆる逆境の傍で、政府のあまりに合法的な手続きの優柔さは目に余る。全大臣が革命から出ながら、まるでさげえが岩にかじりつくように合法性に執着して革命を否定した。そして、人民を攻撃しようとするときにだけ行動力のあることを証明した。共和国の名において、彼らに言わせれば共和国を防衛するために、国家のあらゆる抑圧の道具が利用され、毎日労働者の血が流された。もうここかしこの町ではなくてすべての町で、モゼル銃の濁いた音が若くたくましい生命を奪っている。その間政府は経済面で何らなすところなく、今後もなすことはないであろう。正しくスペイン農民の食人鬼である大土地所有者から土地を収用しなかった。公共物の相場師の儲けを一〇〇分の一に押し

支えている防衛力の破壊を実現するためには、これら少数者が望み、決断するだけで十分だろうか？ 考えてみよう。これらの少数者が数人の過激分子を擁して、ある良き日または不意をついて公権力と対峙し、対決し、我々を革命に引き込む暴力事件を挑発する。初步的な装備、開始のための相当数の突撃分子、これで十分だ。相当数の個人と街頭で彼らに加わるであろう群衆のあてにできない干渉とに対して、革命の勝利が保証される。

準備は整い、成算も完全で、マンモスたる国家を倒すための攻撃開始を待つばかりである。国家は巨大な防衛力を持っている。その力の弾力性と、人民の上に及ぼす道徳的な力と経済力と正当性と道徳的経済的信用が、窃盗や愚行や、その指導者たちの不道徳や無能や、制度の弱体化によっても破滅しないものであるなら、国家の打倒は困難である、あるいはまた、そうでなければ打倒できるだろう、などと考えることは時間の浪費であり、歴史の忘却であり、固有の人間心理に対する無理理解である。そして現実にはそれが忘れられ、忘れられつつあるのだ。しかも完全に忘れられて、革命のモラルそのものすら忘れ去られているのだ。すべて偶然に頼り、予見できないことに期待し、聖なる革命の奇跡を信じている。まるで革命は一種の錬金術で、肉体的苦痛と精神的苦悩で人間が鍛えられねばならない悲痛で残酷な事実ではないのかのように。このような革命観は、権力を襲って何度も成功したすべての政党が一〇年間保護してきた最も純然たるデマゴギーの産物であって、逆説的だが我々の中に支持者を得ており、活動家たちの決定的な核の中で繰り返し確認されてきた。彼らは無意識にあらゆる政治的デマゴギーの悪弊に染まっている。それは、もし

こんな状態で革命が存在し、勝利したとしても、選ばれた第一党に革命を売り渡す、むしろ、まるで政党のはしくれでもあるかのように我々を支配し、また支配する権力を握る、そういう結果に我々を立ち至らせる悪習である。一体、我々全国労働連合は、かかる革命の破局的概念に、実情に、革命的ゼスチャーに、従うことができるだろうか、また従うべきであろうか？

我々の考え——このように単純で古典的で、革命の衣をまとっているが、本質はファシズムである共和国のファシズムを、我々に現実的に招来させようとする革命観に対して、他方では、我々の究極目標の遂行へ我々をあやまたず導き、かつ導きうる、真実の、実践的にも内容的にも唯一の概念が成長しつつある。

これは次のことを意味している。準備とはただ攻撃力や闘争の準備だけではなく、これらの上にさらに、今日最も強力で破壊力を有し、征服されたい精神力をも持たなければならぬ。革命は、多少とも勇敢な少数者の勇氣に過度に依存せず、人民大衆、みずからの決定的解放に向かって歩んでいられる労働者階級、実際と行動と正確な時間割を革命へ指向させつつある組合や連合を席巻する、そういう運動であろうとする。革命は単に順序や方法ではない。それらはせいぜい革命の準備と革命そのものの中に入るべきものだ。だが同時に、個人の創意と、個人に適した態度と行動とのために十分の余地を残さなければならぬ。前者の有する不統一で混乱した革命観に対し、後者は秩序と洞察と統一を備えた概念を進歩させている。前者は反乱、暴動、革命をもてあそび、事実、真の革命を遅延させるものである。

だから、これは、むしろ評価されるべき相違である。少し考え

ら、諸君は全国労働連合に負うているということを忘れないでもらいたい。みずからを利する権利をもち、みずからの運動を監視し、みずからの創意によって行動し、みずからの意志によって決定する権利をもつこの組織に。連合は、みずからの進路を進みつつ、いかにして、いつ、いかなる状態で行動すべきかを知っている組織でなければならぬ。なすべきをなすための人格とふさわしい手段をもたなければならぬ。

諸君がみな、我々全体の置かれているこの異常時の責任を認識するように望む。革命的諸事件が勝利へ導かれると同様、勝利できないときには誇り高く敗れなければならないと同様、革命のあらゆる偶発事件は反動とデマゴギーの勝利へ導かれる、ということとを忘れないように。今こそ、より善であると考えられる立場を各自がとるように。我々の立場は諸君がすでに知っている。そして、我々はこの目的において、いついかなる場合にもしつかりとこの立場を維持するであろう、たといそれゆえに逆流に吞まれることがあるようにも。——バルセロナ、一九三一年八月——ファン・ロペス、アグスティン・ヒバネル、リカルド・フォルネルス、ホセ・ヒロナ、ダニエル・ナヴァロ、ヘスス・ロドリゲス、アントニオ・ヴァリャブリガ、アンフル・ベスタニャ、ミゲル・ポルトレス、ホアキン・ロウラ、ホアキン・ロレンテ、プログレンソ・アルファラチェ、アントニオ・ペニャロジャ、カミリオ・ピニョ、ホアキン・コルテス、イシドロ・ガビン、ペドロ・マソニ、フランシスコ・アリン、ホセ・クリステリア、ファン・ディナレス、ロルドン・コルタダ、セバステリアン・クララ、ファン・ペイロー、ラモン・ヴィニャス、フェデリコ・ウレダ、ペドロ・カ

さえすれば、かれとこれのやり方の利点がわかるだろう。二つの考えのいずれを採るかは、各自が決定するように。

結論——以上、公的性情を有し、かつ原則となる書面の末尾に自分たちの名前を明記するという喜びや気ままな願いで我々が書き、署名したのでないことは、これを読む諸君に容易に理解されるであろう。我々の態度は明瞭である。連合の利益のために必要と考えて、革命について述べた見解の第二に示される立場をとった。

我々は革命家である、確かに。しかし、革命の神話の信奉者ではない。赤であれ、白であれ、黒であれ、資本主義と国家は消滅することを願う。しかし、別のものに置き代えようとしてではなく、労働者階級によって革命が行なわれるなら、いかなる色であれ、あらゆる権力の再生を彼らが阻止することができるようにと願うのである。今日訓練されている国民の深い感情から生まれる革命を望む。我々に提供され、何人かを魅了し、成功すれば何と呼ばれようが、勝利の明くる日には宿命的に独裁者になる、そんな革命なのではない。だが、我々が望んでいるもの、欲しているものは革命なのだ。組織の多数の活動家たちの欲しているものと同じなのだろうか？ここに説明するに足ること、可及的早期に明らかにされるべき事がある。連合は革命組織である、が、反乱や暴動を礼賛し、暴力のための暴力、革命のための革命を崇拜する組織ではない。このように考えるので、我々は全活動家に語りかけ、重大な時期であることを思い起こさせ、行動するか脱落するかによって各自が負うことになるだろう責任を指摘するのである。今日、明日、明後日、何時であれ、革命運動に召集されたな

ネ、マリアノ・プラト、エスパルタコ・ブイ、ナルシソ・マルコ、ヘナロ・ミンゲト。』

一方、中央政府と自治政府は激怒してカタルニャの組織を襲撃した。同年九月一八日、日刊「エル・ルチャドル（戦うもの）」は、フェデリカ・モントセニの論文を組み入れた。その中には政治と連合の面した時局の悲劇的輪廓が示されている。「連合の内的・外的危機」の見出しの下に、次のように語られている。

「私の論文『回状とその結果』以来今日まで、一連の事件が起きました。まず第一に、ブルジョア新聞とマシアとコンパニースとが「連合の重要部分」と呼んだ活動家グループの公開状、第二に、逮捕者たちと「慣れ合いで」、マウラが仕立てた、知事アンゲラ・デ・ソホの不可解な行動によって誘発されたバルセロナのスト、第三に、「ソリダリダッドオブレラ」の社説、執筆者はその元氣と恥じらいをまだなくしてはいないでしょうが、いずれ赤面するだろうような史料です。これらは一〇日か一二日の地味な流れの中で起きた新しい事件であり、私たちの生きている生活の重要性の指標となるめまぐるしい事件です。これらすべての直接の結果は、FAIの重要人物全員に対する厳しい取締りと、連合の深部における内部危機である追放の開始でした。この危機は、最新製の造語で有名な「過激派」つまりアナキストたちに、「責任がある」とされるでしょう。そのとき根拠となるのはバルセロナの指導者たちの政治活動と、CNTの無政府主義的主張に対する彼らの態度です。これらは内部で生じたこと、私たちに関係することです。当局やブルジョアや一般世論に関することそのものについては今は語らなくておきましょう。彼らは、CNTの

内部で、左派と右派の間、一方は連合をヘネラリタートとカタルニャ左派共和党の付属物にしようとし、一方は連合内の自由アナキズムの精神を代表しようとする、に始められた闘争を見て拍手喝采するでしょう。後者は、FAIでも政治家諸氏でもサンディカリズムの先生方でもなくて、「真の連合」、マドリッド大会で地方や人民や組合の全代表たちの口を通して表明されたものです。真正の連合、働く労働者の、信頼し考え戦い一身を呈し、必要あるときは死をも厭わない者たちの、自由主義からも組合専従主義からも決して生まれなかった、また将来生まれることもないであろう連合なのです。この内部危機は、行動と力との団結と統一が最も必要なとき、最も重大で危機的な局面において起きたのです。この分裂の危機はすでに二度までもバルセロナにおける労働者の行動を無効にしたし、また、武装のない我々を、警察と混乱に乗じたコミューニズムの獮師との手に売り渡すものです。この内部危機は分解の一段階であって、周囲の事情で最前線に立たされた者たちの頭にはもはや入らないほど、あまりに強大な労働運動の政治病に陥っています。私たちは久しくそれを見てきました。同様に現在も、全国委員会の回状によって引き起こされた諸事件がバルセロナのゼネストの失敗へ行き着くまで発展していくとうとするのを見えています。バルセロナの事件、警察署の暗殺、知事の錯乱した頑迷な態度、これらは全労働者が統一抗議——大衆に応えつつなされたであろう抗議——の戦闘態勢に入らないうちに、資本家の利益の番人で将来の独裁者であるマウラの専横な姿が象徴する現共和国の弾圧活動に、広大な陣地を与えてしまったのでした。アンダルシアの悲劇、アンダルシア農民を犠牲にし

て、しかもスペインの他の地方では抗議も連帯も見出せなかった弾圧の後で起きたこの事件は、政府の前には取るに足る勢力の何もないことを明らかにしました。最後に、組合運動の指導者たちが有名な自治会に賛成してマシアと結んだ協定が、この一覽の仕上げをするでしょう。カタルニャがたび自治会をもつや、CNTの「良い子たち」には寛容な社会政策が始められましたが、FAIの名高い「過激派」に対しては「ねじを締めよう」——コンパニイスの言葉——。バルセロナにおける連合はマドリッドにおけるUGTであるということを受納しない者はみな、過激派とみなされました。そして、ヘネラリタートと共和国政府との関係においては、どちらかと言うとCNTはカタルニャ寄りで、全国委員会を終生ここに置いたのですが、スペインの他の地方には関係しないことになるでしょう。すでにセヴィリヤとサラゴサのストライキに関係せず、このストライキを失敗もさせなければ発展もさせなかったのと同じ程度の名声と知性の得失にだけしか関係しなかったように。分断され、分割され、散発的な運動に限定され、いかなる統一行動にも不毛で、アナキストと、義務と理想を自覚するアナルコサンディカリストに対して開始された追及のために活動と決断と精神的原動力とであった分子を失ってしまったスペインのプロレタリアは、政府の仕事を行行する猛獣使いにとってもかく圧さえやすく、扱ひやすくなるでしょう。一つ一つの大会が公然のスキャンダルになるでしょう。一つ一つのストが言語断絶の憶病と支離滅裂の恥すべき見せ物になるでしょう。一日一日が私たちの新しい恥と政府の新しい不正との積み重ねになるでしょう。共和国は強化され、組織化されるでしょう。共和

国はブルジョアの厚顔な奉仕人になるでしょう。共和国は全大衆と羊のような議会全体とにのさばる——そう、悪徒の手で操られるようになるでしょう。共和国は、社会民主主義だけでも、ついにスペインの所有者、主人になるでしょう。そして、私がすでに四月一日以後に書いた論文で述べたように、イベリアの社会と政治の発展はつかの間で中止されるでしょう。しかもここ、自治会の慰安の地、マシアの善意——これもまたありうること——が私たちに約束した天国、に存在するのは、新設のカタルニャー〇〇人事事会の「第四部会」になってしまった連合、平和政策、労資「協調」政策にてなずけられて政府に入った連合、イギリス流の労働党連合なのです。博愛主義の政府の用と、侵蝕され過ぎたブルジョアの秩序の支柱とに供するためにバルセロナで捏造され、同時に世界に輸出された組合主義的民主主義があるのです。FAI、恐るべきFAIに関して言うと、結局のところ、一群の野心家と低能のおかげで、憶病でないということ以外に値打ちのない二人の男に象徴されています。「ミラドル」の万力であるFAIに関して言うと、まあ、市民やイベリア人民の兄弟の皆さん、彼らは万力を押しつけられて、本当に、マウラ、コンパニイスから「ソリ（ソリタリタッド・オペレラ）」の編集部の最後の一人までも、たとえようもないリュイとヴァリエスカと憐れなマシア氏のことを覚えていて、残酷にしめあげられて方向転換するでしょう。彼らは、FAIが神話の怪獣ミノタウロかドラゴンで、何人のテセオスでも聖ジョージでもかなわないということに彼に信じこませたのです……」

組合本部を襲撃しようとした。労働者たちは本部にたてこもった。包囲は数時間続いて罷業者側と警察側の双方によって盛んな打ち合いが演じられた。最後に守勢の側は市当局に対して軍隊がきても降伏しないと宣言した。司令官メドラノ指揮下の兵隊の特務班には都合のいいことだった。しかし、逮捕された者たちは警察署まで運ばれて、署の建物の前で突撃隊によって掃射された。

一九三二年一月一日、アルト・リョブレガトとカルドネルの鉱山地帯で暴動が起きた。決行したのはCNTに好意を抱くフィゴルスとサリエントの坑夫たちだった。革命家たちは私有権と貨幣を廃止して、自由共産主義を樹立した。中央政府は「通行証を携えた叛徒たちの同盟をけなしていたが、五日目に運動を圧殺した。弾圧はカタルニャ全体と東部アンダルシアに広がった。何百という囚人が彼らを流刑地へ運ぶはずの船底に叩き込まれた。大西洋航路の「ブエノス・アイレス号」は、二月一日バルセロナ港を出て、スペイン領西アフリカに進路をとった。追放者の中にブエナヴェントウラ・ドゥルティとフランシスコ・アスカソがいた。彼は、「ブエノス・アイレス号」出航の直前に次の別れの一筆をしたためた。

「親愛なる友人諸君、羅針盤の埃をはらい始めたようだ。我々は行く。多くのことを語る言葉だ。行く、——詩人によれば——しばし死すことだ。しかし、詩人でない我々にとって行くことは常に生命の象徴だった。祖国なき永却のユダヤ人のように常に去り、永遠に歩む。生きるべき境界を見出せなかった社会を離れ、追放された階級に属し、世界にいまだ一くれの地もなく、歩みが常に生命力の印だった。我々がここに、兄弟たちの心と魂に生き続けることを知っているなら、行くことがどうだと言うのだ？」

(一) バルセロナの組織のストライキを理由に、警察はメルカデス街の

しかも追放されようとするのは我々ではなくて、我々の理想である。我々は去ることができようが、理想はとどまる。そして我々を呼び戻すのはその理想であろう。我々に行く勇氣を与えてくれるのもそれである。

生きがためにはかかる手段に訴えなければならぬ憐れなブルジョアノ。我々を追放することはできない。我々とは交戦中であつて、彼らが防戦するのは当然なのだ。追え、葬れ、殺せ。一矢を報いずして死ぬ者はいないだろう。それは人も牛馬も同じことである。恨むらくはそれらの矢が犠牲を出し、なかなんく倒れる者が兄弟であるとき。しかし不可避の法則だから受け入れなければならない。その苦しみが軽からんことを。それを思うとき、鉄の板も我々の喜びを抑えるには役に立たない。なぜなら、我々是我々の苦しみが目的の第一歩であることを知っているから。何かが崩壊し、死滅する。その死は我々の生、我々の解放である。そんな苦しみは苦しみではない、逆に長い間抱き続けた夢が生きていることだ。我々の魂を養い、我々の生命の空白を満たしてきた理想の実現と展開とに参加することだ。

だから、行くことは生きることである。君たちに贈る我々の挨拶はさらばではなくて、すぐ、またである。——フランシスコ・アスカソ。」

追放は、スペイン全土に雪崩のようなゼネストをもたらした。動乱の焦点は地中海沿岸と内陸のいくつかの都市や村に伝えられた。

二月四日、バルセロナ近傍の工業地タラサのアナーキストグループは集会を開いて、追放に抗議する革命的ゼネストの宣言を決定

した。一五日から一六日の夜、これらのグループはピストルや銃銃や手榴弾で武装して、市の戦略地点を奪った。第一段階は警備隊の営舎を包囲攻撃することだった。そこには中尉の指揮下八〇組の隊員が宿営していた。別のグループは市会を占領して、赤黒旗を掲げた。一六日午前八時頃に、サバデルから警備隊の援軍が到着した。戦闘はこの瞬間から全面的になって、革命側は市会にたてこもった。降伏命令に対して彼らは、軍隊でなければ降伏しないと答えた。午前一時頃、一個中隊を前に置いてのことであつた。

これらの事件に続いた処置は、以下の活動家たちの処分だった。ラモン・カサラモナ、アントニオ・オリヴァレスとホセ・オリヴァレス、フェルナンド・レストイ、マヌエル・リコ、トマス・ソラン、ミゲル・エルナンデス、デイエゴ・ナヴァアロ、デルフィン・パディア、ルイス・フォルテト、フィデル・レチオン、ラモン・フォルフ、ラモン・ソレル、ロレンソ・タビオラス、ホセ・リムパウ、ホセ・プイ、ダニエル・サンチェス他二〇人の同志、そのうちフリアン・アバドは三カ月後に逮捕された。

宣告された量刑は次のとおりである。四人は二〇年と一日、七人は六年と一日、二人は釈放、四人は起訴中に除かれ、残りは二年と一日だった。

二月八日の革命運動の前夜、バルセロナ市のモデル刑務所で大規模な脱走が起きた。日の目を見ることができた五八人の囚人のうち一二人がタラサのグループに属していた。そのうち数人が再逮捕された。この囚人たちは、一九三六年二月の選挙の後まで最終的な自由を回復することはできなかった。

CNTの地方連合全国大会の決議によって、一九三二年五月二九

日、全国的抗議運動が宣言された。政府は公式にこのキャンペーンを禁止したので、運動は抜き打ちに実行された。数人の逮捕者に対して、白昼しかも純然たる公園マリア・ルイサで逃亡法が適用された。同市では「コルネリオ館」で知られる連合の本部が砲撃で破壊された。今や、アルネド型、エピラ型、カステイルブランコ型の虐殺が、警備隊の野蛮な協力によって（この恐しい部隊の総司令官サンフルホ將軍の表現に従えば「スペイン魂」）続行された。

八月一〇日早朝、マドリッドで陸軍省と情報局の突撃を企てた暴動が勃発した。政府は最初から事態を制圧していた。ほとんど同時に、前警備隊長で現狙撃隊長のサンフルホ將軍は、セヴィリヤの事態を掌握した。CNTは、官権の大部分の無関心あるいは共犯に對抗して、叛乱者による宣戦状態であるにもかかわらず住民の動員に成功した。アナーキストグループは、貴族の巣である商業クラブ、新会館、自作農クラブを襲って放火した。叛徒たちは投獄された。その日セヴィリヤの連合が掲げた声明の一つは次のように述べている。

「兵士、労働者、農民諸君ノ。スペインを独裁制という暗い失敗の最も不名誉な悪評に沈めたのは専制的武断的血統を継ぐ軍隊であつた。軍隊によって、思想は束縛され、国民の自由は蹂躪され、あらゆる種類の犯罪が行なわれていたのであるが、その最も陰惨で反動的な一派の暴徒的犯罪の襲撃はついに我々全体を襲い、我々の歴史と我々の良心を汚し、最も不吉な十字路に人民の主権を埋葬しようとしている。このような事態の異常性と重大性に無知であることはできない。かかる卑怯な挑戦に対しては、市街や近郊の平地で市民戦を開始しつつ、革命的ゼネストで応じる

しかない。

一つ一つの家が城塞となり、一つ一つの屋上が要塞となつて、権力の攻撃的軍国主義に対する英雄的な行為を市民の自由によって積み上げるように。

兵士諸君ノ。君たちの弾丸が革命法廷のつたこの敵しい判決を抑えることはできない、革命法廷は現時局ではすべてに優先して尊重され、また人民に従うべき最高の権力であるノ。

武器をとれノ。軍事独裁を打倒するまで巨大な努力によってあらゆる反乱に訴えよ。

この反動的犯罪的血統を根絶するための勇氣と行動を。ブルボンの將軍たちや暗殺者たちに従うな。

労働者諸君ノ。兵士諸君ノ。街頭で共に闘いを続けよ。CNTは諸君に闘争を呼びかける。

社会的闘争ばんざいノ。決起せよノ。——革命委員会。」

カタルニャにおける体制の自力回復は同地方の情勢を複雑にした。カタルニャ政府は最初から桁はずれのナシヨナリズムに特徴づけられていた。ライレトやサルバドル・セグイの旧同志たち、すなわちコンパニイス（CNT弁護士）、マルティ・バレラ（ソリダリダッド・オペラ「前経営者」）、ハイメ・アイガデ（労働者前医師）ら、地方政府の代表をもつて任ずる若い党指導者たちは、カタルニャにおける二つの勢力、「共和党左派」とCNTの共存を許すことができなかった。カタルニャ政策の道具であり、マウラ（「一〇八人の死」）に命令された執行人であるデンカス、パディア、アングラ・デ・サホは、組合を組織的に閉鎖し、その新聞を廃刊し、行政逮捕と警察と「ベテン師たち」のテロ政策によって、CNTを圧迫しよう

とした。左派の「農場」は秘密の地下牢になった。そこへ連合の労働者たちが捕えられて叩き込まれた。これが一九三三年一月八日の革命運動の原因だった。

バルセロナでは、戦闘の合図は、警察の最高本部の敷地のごく近くにかけられた二弾の強力な爆弾の爆発だった。戦闘の初めに主要な活動家たちが逮捕されたので、この運動の規模はランブラス通（料理組合でホアキン・ブランコが死亡）といくつかの兵舎の前と労働者地区における散発的な撃ち合いに縮小された。（バルセロナ市について。レリダでは、「ラ・パネラ」営舎襲撃が意図された。この行動で組員ブリリョ・ゴウ、オンシナス・ヘシオが死んだ。タラサでも撃ち合いがあった。サルダニョラリポリュトでは自由共産主義が宣言された。

一月四日の革命運動は、CNTとFAIの活動グループからなる戦闘組織である防衛隊によって組織された。これらのグループは装備も不十分で、契約をしたいくつかの部隊と大衆の感染性に期待をかけていた。鉄道のゼネストは、UGTの鉄道全国組合に対して少数であるCNTの輸送支部に依存して、決して始められなかった。彼ら自身の日刊「CNT」に載ったこのストライキに関する広告には、アサニャ政府を戦闘体制に置いた。兵舎は今回は革命家たちの呪文にも門を開かなかった。人民は冷淡な態度をとり、と言うよりは非常に慎重さでこの運動を迎えた。

東部では、リバロハ、ベテラ、ベドラバ、ブガラで反響を呼んだ。これら全部の町では情勢は次の五つの局面に分析できる。

第一——叛徒たちが、武器をもっていそうな「秩序ある」市民の住居に押し入った。武器を押収して街にとび出し、住民に蜂起を呼

びかけた。犠牲者は出なかった。武器のない者は自由だった。社会革命は拘留所や刑務所を嫌悪するものだ。人民は恐れて中立に留った。市長は市役所の鍵を引き渡した。

第二——かき集めの貧弱な武器で治安警備隊の営舎の包圍攻撃が始められた。同市長は軍使として降伏命令を警備隊員らに伝える役目を負った。隊員らは逃げるか抵抗した。最後に戦闘が始まった。

第三——革命家たちは自由コンミュニオンになった市役所から自由共産主義を宣言した。財産に関する文書類が公園の野次馬の前で焼き捨てられた。貨幣と私有財産と人間による人間の搾取の廃絶を宣する布告ないし通告が出された。

第四——警備隊と警察隊の援軍の到着。叛乱者たちは多少の抵抗をした。運動がスペイン全体に広がっておらず、そのすぐれた意図も孤立していることに気づくのがあまりにおすぎたためである。

第五——山地へ向かって潰走する後から、弾圧軍の人狩りが追った。男女年令の区別ない殺人という凄絶なエピソードだった。大量逮捕、それに続く警察署の穴蔵での殴打・拷問。「秩序」側の新聞は革命家たちの偽りの姿を公開し、官憲の罪状を陰蔽した。歴史的制裁のローラーが回転し始め、拷問を受けた肉体の塊をスペイン中の刑務所へ送り出した。

アンダルシアでは、辺境のアルコス、ウトレラ、マラガ、ラ・リコンナダ、サンルカル・デ・バラメダ、カディス、アルカラ・デ・ロス・ヴェイエハスの脅威的性格をもっていた。

次の戦慄すべきルポは「ラ・ティエラ（大地）」編集長で当時の全革命運動の解説者であるエドゥアルド・デ・グスマンの筆になるも

のである。

「自由共産主義——数時間、労働者が人民の主人となり、自由共産主義が宣言された。午前七時から午後四時まで革命はスペインで勝利したと考えられる。赤黒旗が風にはためき、武装した農民たちが情勢を掌握していた。そしてこのしばしの勝利の間、労働者たちは誰に復讐することも何を破壊することも、彼らの敵となりうる何者を苦しめることも考えなかった。人民の中には家族といっしょに何人かの工場主がいた。誰も攻撃されず何も要求されなかった。みな尊重された。同じことは数少ない商店でも見られた。教会と神父にさえ……自由共産主義が始まった——今日までに宣言されたあらゆる国の人民においてと同様に——、いかなる種類の暴力も殺人も盗みも、何者に対する暴行もなく、全世界を絶対的自由へと解放した。ただ、革命の勝利を確保するために障害と考えられる者の武装解除が要求された……カサス・ヴィエハスの農民たちはそうした。彼らの無教育と胃をかむ空腹にもかかわらずだ。（数日後メディナで一人の若い馬鹿者が、革命家たちが実現しようとした女の割り当てという幻想について語ったからとて、妨げはなまらぬ。）

夢は消えた——メディナでは企図は失敗した。衝突は十分計算していたのだが、多数の警備隊員の出現がそれを狂わせた。彼らはヘレスへの途中、数時間同市に滞在したのだ。小さい事件、小競り合いがあった。それだけだった。正午になってカサス・ヴィエハスとの通信が切られているのがわかった。故障の場所へ急拠一人の技師と三人の隊員が出発した。着いたとき、草むらに数人の人影を発見した。隊員が止まれと命じた。それから発砲した。

三人の農民を逮捕して起きている事件をききたした。彼らはメディナに戻った。そこにいた全警備力が集められた。いく組かの治安警備隊と一〇人の突撃隊員だった。急いでバナルプに出発し、午後四時ころ着いた。村に着く前に射撃を始めた。革命家たちは狼狽してしまった。それだけの勢力にいかに応じるか？ 革命は失敗したということか？ 狼狽と混乱が拡大した。営舎を引きはらって各自の家に退散した。活動部隊を占めていたものの大部分が山へ逃げた。それ以上血を流したくなかった。無用の悲劇を避けようとした。警備隊員らは撃ちながら入ってきた。何にも巻き込まれたことのない一人のかわいそうな住民が弾に当たって死んだ。軍服の男たちが村を占領した。静けさが戻った。ほんのしばらく、一発の銃声も聞こえなかった。突撃隊員らはそのとき家々を捜索するために押し入った。銃をかまえて家の人たちをねらいながら侵入した。何軒か捜索されたが何も起こらなかった。全部で五軒だった。そこで捕えられたものがあつたらうか？ 十分ありうることだ。捕えられたものがどうなったかは誰も知らなかったが。しかし、六軒目に来たとき、新たな衝突が起きた。小屋——四方は石を互いに積み重ねたみすばらしい壁で、屋根は木と小枝——の中に、「六本指」——七〇くらいの老人で、強くて元気で勇ましかった——と息子のベドロとフランシスコ、嫁のホセファ・フランコ、孫のクロとペリコ、隣人のフランシスコ・ラゴとその娘のマヌエラが逃げ込んで隠れていた。一人の突撃隊員が戸を銃の台尻で叩き破って開け、銃をかまえて入った。一発銃声が聞こえ、その突撃隊員は倒れて死んだ。仲間たちは後退した。一番大胆なのが、閉い場——石壁のある小さい裏庭——から入る

うとして、同様に姿を消した。片腕に傷を負っていた。つまり倒れたのか、撃たれたのか？ 同じことだ。仲間のうちに狼狽が満ちた。家に入ろうとして仲間の二人を失ったのだ。後退した。有利な地点をとって撃ち始めた。「六本指」が応酬した。しかし、少ししか撃たなかった。明らかに乏しくなっている弾を有効に使わなければならない。援軍を求めた。援軍が着くと村中に恐慌が広まった。隣人たちは家に隠れた。もっと恐れた者たちは山へ逃げた。ただ「六本指」の家だけから警察力に対する発砲が行なわれた。ゆっくり時間がたった。九時ごろ、さらに隊員たちが到着した。機関銃がいっしょだった。家の位置に面して通りの反対側にある無花果の木におおわれた小山の頂上に引き上げられた。ところが二発の銃声が響いて、その弾にあたった二人の隊員が転落した。彼らにとって幸運なことには、「六本指」は散弾しか持っていないかった。警官たちの混乱は増大した。戦闘の数時間が続いた。家の中に消えて死んでいるにちがいない二人の突撃隊員がいた。また、重傷を負った二人の警備隊員がいた。最後に散弾にあたった二人の突撃隊長がいた。反対に彼らはまだ一人も倒していなかった。たった一人の無辜の田舎者が村の窪地で倒れて死んだだけとは……明らかに敵は劣勢だった！

アントニオ・バルベランはいかに死んだか——しっかりと握えつけられた機関銃が射撃を開始した。だが、弾の雨も何の効果もあげなかった。石にはねかえって損害を与えなかった。逆に、「六本指」は散弾を節約して、誰かが的になるときだけしか撃たなかった。隊員らは再度電話して、手榴弾、家を粉砕する爆弾、中のものをすべてを破壊するようなものを要求した。隊員たちは射撃に

ば、かわいそうな動物は、まともにやられて倒れた。夜の闇が遠くではお転婆娘の姿をほかした。この家を出た最後の生存者になるだろう、残った者たちは瓦礫の中で死ぬだろう、憐みも恕しも知らぬ神の犠牲となって！

火事——明け方近く、頼んでいた手榴弾が到着した。小山の頂上から家の爆撃が始まった。小屋のまわり屋根の上に葬いの音を響かせて落ちた。どれかが爆発して、その音は寒村全体を震わせ、恐怖と悲嘆をいや増した。それは村人の被災だった。しかし、大部分が屋根を転って開い場裏庭に不発で落ちた。そういうのはほとんど損害を出さなかった。この手段では効果があまりなかった。もっと派手で、決定的で、人々の心に強い印象を与えるようなものが必要だった。(そして、スペインでは爆弾は革命家も警官と同じようによく使うので、もともと無用化しているらしい。) ちょうどその時だった、かの大都市に放火した皇帝の退廃の精神にも匹敵する悪魔のような考えを思いついたのは、ほろ家に火をつける。家の者らを焼き殺す、あるいは無理に出てこさせてそこをねらい撃ちする。さっそく、ぼろ布少々にガソリンが含まれた。火をつけられ、燃えながら木と小枝で葺かれた小屋の屋根に投げられた。火の弾は火花の尾を引いて空中を飛んだ。数秒間に燃えている布がいくつかぼろ家の上に落ちた。たちまち屋根が燃え始めた。突然炎が噴き上って、無気味な光が村中を照らし出した。一方、機関銃が窓や戸口やそのまわりを掃射した。火の中から逃げ出せば弾の餌食になるだろう！……それは野蠻で凄絶で悲劇的な光景だった。屋根全体が巨大なかがり火だった。燃える藁の匂いが空中に漂った。小屋から苦痛の叫びがあがった。炎は相

あきた。夜中になると射撃は衰えた。発砲の止まった一瞬があった。近所の七〇の老人アントニオ・バルベランはこの機会に孫を父親の家に連れていこうとした。隊員たちに外に出てもいいかどうか尋ねた。いいという返事だった。小供といっしょに家を出た。忘れ物のためすぐに引き返そうとした。そのとたん射撃音が響いた。老人は震え上がって、どうしていいのかわからず、恐怖で動けなくなった。小供は隊員たちに向かって声をかきりに叫んだ、——僕のおじいさんを撃たないで、アナーキストじゃないんだから！——

老人の息子サルバドルも同じことを叫んだ。けれどもみな無駄だった。一発の弾で彼はもんどりうって倒れた。息子と孫は彼が死んでいくのを震えながら見ていた。奇跡的に命は助かった。機関銃はその悲劇の射程の中を彼らを見失った。そして霰弾を吐き続けた。父親が倒れるのを見る息子の苦しみも孫の恐怖もかまわずに。生命に対する彼の明確な第一印象は、警官に撃たれて心臓をやられた祖父が永久に倒れた瞬間だったにちがいない。二人の「逃亡」——夜が更けていった。星が見えた。夜明け前、悲劇的な戦闘の話の結末。「六本指」は不敵に抵抗を続けた。静寂の一瞬間に裏側から一人の小供が走り出た。「六本指」の孫で一〇才になる子だった。隊員らが撃とうとしたとき、小僧は夜の闇に吞まれて無花果の木の間に見えなくなった数分後、女の子が同じ事をしようとした。裏側からとび出した。影に身をひそめながら全速力で走った。弾がまわりに跳ねかえった。死が脅威となって降りかかった。まわりに落ちる弾の破片の一つ一つに死が近づいた。小娘が逃げていく道の近くにつながれていたら

当高くまで達した。屋根を支えている柱がきしんで、間もなく崩れ落ちた……中から全身炎で包まれ恐怖に気の狂った男が走り出た。弾丸がそのまわりに悲劇の影絵を描いた。すぐ彼に当たった。身を震わせ、傷口に両手を当て、地面を転がまわって、死んだ。同時に中から女の子が走り出てきた。燃える服が半身を包んでいた。炎が硬い乳房をかんていた。腹と両脇が潰れていた。悲鳴をあげながら走り狂った。まるで人間の松明だった。すぐ弾丸で致命傷を負って父親の傍に倒れた。……その間火事は続いた。木をばう炎の音にもかかわらず、中の者たちの苦悶の声がはつきり聞きとれた。冷然として小屋の周囲の機関銃掃射が続けられた。屋根が火の粉と灰の渦巻く中に落ち込んだ。最後の叫びがあった。引き裂くように、恨みをこめて……あたりに肉の焼ける匂いが広がって鼻をついた……「六本指」は死んだ。その肉体は巨大な火葬場で焼かれた。伝説とロマンスの老雄のごとく。敗者が勝者の名譽のための贅えになった未開時代のごとく。敗れた反逆者の横で彼の息子や嫁や孫を屠ることが夢にもならない些事だったあの苦悩の世紀のごとく……火災が死体を焼いた。悲劇の下手人たちに降りかかる火の呪いのようにであった。——エドゥアルド・デ・グスマン。」

墓場の平和が訪れ、人心は議會開会の広間に移っていった。マヌエル・アサニャ、「負傷者も逮捕者も残すな、命をさせること」という命令の下での弾圧の張本人は、「魔女物語」の恐るべき審問をも恥じ入らせた。

その年の暮れまで、CNTは一層たけり狂う弾圧と内部危機の頑強な追い打ちという二重の試練を生きていた。連合のパロメーター

たるカタルニヤはそういう傾向の戦闘の舞台だった。一九三二年二月下旬、サバデルで組合の地方大会が開かれた。二万の加盟者が直接の代表者を出した。この会議は激しく対立する二つの流派によって特徴づけられた。三〇人グループのメンバーはここで組織における重要な位置から退き始めた。アレハンドロ・ヒラベルトがこの大会以来エミリオ・ミラに代わって地方書記になった。ペスタニャとアリンは全国委員会にとどまった。前者は後にサンディカリスト党をつくって公然と政治に関係するであろう。

サバデル大会で、同市の地方連盟をつくっていた全組合の退場が起こった。口実は「F A Iの独裁」だった。地方委員会は九月二四日に原則的にその追放に着手した。除名された組合は二万以上の加入者を擁していた。

一九三三年三月五日から一三日にかけてバルセロナで別の地方大会が開かれた(シネ・メリディアナ館)。この大会以降サバデルの組合の決定的追放が進行する。地方委員会の報告の中から、カタルニヤの組織の状態について次の資料を抜萃しよう。

「カタルニヤ地方連合は加盟する二五地域三地方から成り、失業労働者も含めて三〇万以上の加盟者を結集する二七八の組合を擁している。」

報告は加えて言う。

「共産主義者の分裂策動はまた、いくつかの組合の排斥も要求している。そうということがレリダ、ヘロナ、タラゴナで起きた。レリダでは地方連盟は、CNTに友好的な組合が増しにシンプを獲得しているにしても、共産主義者に属している……反対に田舎はみなCNTに加盟している……タラゴナでは五月下旬に地方

連盟がCNTから分離した。まず共産主義者らは労働者をたまたまことに成功した。だが労働者たちはすぐに反発して、現実には地方連盟は労働ブロックの連中にあきまかれていたのだが、分離して、CNTにつく組合の地方連盟を新たに建設した。」

三〇人派に指導される加盟者の量に関しては、少数とはいえ相当あった。東部では冶金、木材、運輸のような最強の組合が反対側にいた。三〇人派のもう一つの地盤はウエルバだった。ガライカやアストゥリアスのようないくらかの地方では中間派に友好的だったが、連合の統一を壊すほどではなかった。セヴィリヤでは公式の共産党が港労働者の間に亀裂をつくることに成功し、モスクワのためにCNTを手に入れるという指令を実行に移していた。コメディアの会議での決定に基づいて、また、CNTがそれゆえにコミンテルン路線から分離したサラゴサ会議の攪乱的決議を宣言して、共産主義分子は一九三〇年以來「CNT再建」を遂行しようとしていた。しかしブリエホスとアダメの企図が失敗して別の指令を受けた。CDTU(統一労働党連合)の名の下に新しい組合の本部をつくるという指令で、達成するためには彼らの不変の決まり文句「基本点での統一戦線」に手を加えなければならなかった。モスクワ派の新しい落とし子は、コミンテルンがその新戦術の情ない結果に気がつくまで脆弱な命をながらえていた。他の戦術上の転換はUGTと社会主義青年団を抱き込む目論見だった。CNT攻略に失敗したことはスペイン共産党の上部勢力の中に粛清をもたらした。その結果は共産党書記局と党自体からのアダメ、ブリエホス、ベガおよびトゥリリヤの追放だった。

編集後記

「黒の手帖」も刊行三年を迎える。季刊はのぞめぬとしても、年三回は刊行したいとかんがえているのだが、昨年はついに二号しか出せなかった。

もちろん、本当に書きたいとおもうことを書く、そしてそういう原稿が集まったところで刊行する、という当初の方針からすれば、年一回でも、二回でもかまわぬことになろう。

しかし、本当に書きたいとおもうことが、あるいは書かなければならぬことが、量的にも質的にも、現状の有様だとはいえ、ふりかえってみて信じられぬくらい

の貧しさである。ぼくはこの一年、組織論を自分のテーマに設定してきたが、しかし、まだ序の口によくやくたどりついたにすぎない。日暮れて道遠し、などと澄ましていら

れるか、とおもうのである。今年も、他の仕事はさしおいても、このテーマをとことんまで追求していくつもりである。

◇ ◇ ◇
内村剛介「トロッキーの赤軍創建と文化の運命」は、前号「記念」は反革命の足掻きである「に引きつづく労作である。内村の獄中記「生き急ぐ」は、最近深く考えさせる衝撃を与えてくれた書物だが、そのなかの一節

「あるイデーが、ある思想が生まれ、思想そのものとして、人間そのものの鬼子として、人間そのものを食い散らしているのではないか」という怒りは、この論文のなかにもつらぬかれている。

人間を食い散らす思想という鬼子が横行したのは、たんにスターリン時代だけではない。一九六八年の日本にも、小さな鬼子がごまんといる。それはまさに現代という時代の病理なのだ。

◇ ◇ ◇
秋山清「ロシア革命とアナ・ボル論争」は、二号に掲載された「女人芸術」誌上のアナ・ボル論争」につづく、アナ・ボル論争史論の第二章である。ロシア革命に対する大杉栄の態度については、すでに秋山は「ロシア革命と大杉栄」(思想)一九六四年一月)を書いている。また、大沢正道「大杉栄研究」(一九六八年 同成社)中の6章「ロシア革命とアナ・ボル論争」を参照していただきたい。

◇ ◇ ◇
ホセ・ペイラツ「スペイン革命におけるCNT」は、今号でははその前史ともいふべき叙述を終わり、次号からスペイン革命を主題とする章に移る。

◇ ◇ ◇
一号、三号は品切れ、二号のみ若干在庫がある。

黒の手帖 第四号
一九六八年一月十日
発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社
東京都新宿区北山伏町三三
(大沢方)

電話二六〇局・八五二七
印刷所・株式会社清水印刷所
東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇
電話三六三局・五一二一

定価・一五〇円

送料・四五円

二号分前納・三五〇円

(送料共)

四号分前納・七〇〇円

(送料共)